



# すみだの風景 墨田区内の河川

## その3 豎川と橋の沿革



一之橋から隅田川方面を臨む

この川に架かる橋は、かつて区内だけでも13に及びました。このうち、隅田川に一番近い一之橋から四之橋までは、万治2年（1659）の本所開拓の時に整備され、一ツ目通りから四ツ目通りまでの大通りに架かる橋という意味から名付けられました。

一之橋は長さ13間（23・4m）、幅2間半（4・5m）ほどで、赤穂浪士が泉岳寺に引きあげる際に最初に渡った橋としても知られています。大正10年（1921）3月の東京市の調査によると、一之橋の下を通過した船は一日に296隻にも達しました。

一之橋の隣に架かる塩原橋は昭和3年に架けられました。橋の名はこの辺りに住んでいた塩原太助にちなんでいます。

太助は上州（現 群馬県）から江戸に出て、天性の商才と血の出るような努力によって、薪炭商人として財をなしました。豎川はその商品の重要な輸送路として活用されました。

塩原橋の東に千歳橋があります。かつて豎川と小名木川（江東区）とを結んだ六間堀川は、ここから分かれていました。

さらに東に続く二之橋と三之橋との間には、西豎川橋、豎川橋、新豎川橋があります。これらの橋の架けられた時期ですが、豎川橋が明治12年（1879）で最も古く、他の橋は昭和初期

です。

また、三之橋と四之橋の間には、菊花橋、新辻橋、牡丹橋跡が続いています。新辻橋は本所奉行が元禄8年（1695）に架けたもので、他は昭和初期に架橋されました。

昭和初期に架けられた橋が多いのは、関東大震災の際、橋が少ないために被害を大きくしたという反省からです。

牡丹橋は近くの江東橋五丁目に沿った江東区毛利一丁目あたりにあった牡丹園にちなんで名付けられ、開花の季節には賑わいました。

豎川は現在、菊花橋の先で大横川と合流し、その先の新辻橋から四之橋、さらに東の松本橋までの間には水の流れは無く、親水公園として整備され、グラウンドゴルフ、ゲートボール場、テニスコートにも利用されています。

豎川が横十間川と交わる50mほど手前の松本橋は、松代町（現 江東橋四丁目）と本村町（現 江東区毛利二丁目）の1字ずつをとって命名されました。

豎川は横十間川と交差し、五之橋から先の流域は江東区によって豎川河川敷公園として整備され、公園内では細い流れとなつて、旧中川に注いでいます。

参考 「橋はかたる」

（墨田区教育委員会

昭和58年3月）

豎川は大横川・横十間川などと同じく、本所開拓にともない、徳川幕府の手によって開削された堀割です。両国橋の200mほど南で隅田川と連なり、そこから東へまっすぐ約5km流れて、旧中川に注いでいました。

江戸時代の豎川の両岸には全国から船で運ばれた品々を扱う商家や土蔵などが建ち並び、橋を行き交う人々も多く、大いに賑わっていました。

中川は水路として大きな役割を果たし、豎川も重要な輸送路となっていたのです。しかし、

明治44年（1911）から昭和5年（1930）にかけて行われた荒川放水路の開削により中川は分断され、その一部となりました。

現在は、豎川の上を首都高速七号線が走り、墨田区と江東区を通る流域には、親水公園となり、水の流れていない区域もあります。

豎川という名称の起源は、江戸城に対して縦の関係にあるからという説や、隅田川に対して縦の関係にあるからという説などがあります。